

アイヌ語地名の痕跡化

鏡 味 明 克

1 はじめに

アイヌ語地名の痕跡化については、これまでも、アイヌ語の語形変化、日本語化について、とくに、その当てられた漢字による変化を考察してきた。本誌においても、以下の一連のアイヌ語地名の変化についての論を展開してきている。「アイヌ語地名の日本語接触変化」本誌18号（2003年9月）、「北海道におけるアイヌ語地名の現代日本語接触変化」19号（2004年9月）、「北海道におけるアイヌ語地名の好字への書き替え・読み替え」20号（2005年9月）である。また、漢字をあてることによるアイヌ語の変化については、早くから各種の事例を取り上げて検証を行ってきた。その最初は『国語学』119号（1979）に執筆した「地名の分布図を読む」で、その中で、下北半島の裳川（ほろかわ）の地名はポロナイのナイの部分が、同じく青森県の平内（ひらない）町平川（ひらかわ）はピラナイのナイの部分が、「かわ」と日本語化されたものであるとして、このような事例を「半翻訳」と呼んだ。この半翻訳に対して、八戸市尻内（しりうち）の場合はシリ・ナイのナイの部分が「内」の当て字を「うち」と読み替えることによって変化したものと解し、このような事例を「半訓読」と呼んだ（「東北地方におけるアイヌ語起源の地名の日本語化」『語源探求』第3集1991）。この論文では、次に、漢字の「読み替え」による変化も明らかにした。これは借訓字を別の訓に読みかえることにより、アイヌ語の語形から離れたものと推定されるアイヌ語形の復元であって、秋田県にいくつも見られる「檜内」（ひのきない）は、この語形そのものからはアイヌ語と解されないが、「ひのき」が「檜」の字の「ひ」の読みからの読み替えと解するならば、ピ・ナイ（小石川）というアイヌ語形が復元される。このような「読み替え」を探る必要を述べたのが、この論文の新見であった。

次のアイヌ語形復元の試みの新見は『人間文化』18号で提示した、北海道に多い地名なのに東北地方に見られないコタン（集落）のアイヌ語地名はどこへ行ったのか、どう消えていったか、という問題提起である。東北地方の地名例を検証する中で、「小谷」（こたに）と呼ばれている地名にその痕跡がないか、「古館」（ふるたて）の地名がコタンから「こたち」を経て「ふるたて」へと読み替えられていないか、というのが、その

提起であった。

今回の本稿でも、これらの方法を踏まえて、「痕跡化」という観点から、これらの事例を分類して、アイヌ語地名のわずかな、あるいは潜在化した痕跡を復元する方法を進めるステップとしたい。

2 「痕跡化」の型の分類

上述のように、これまで考察を進めてきたアイヌ語地名の変化の型を、今回は、「痕跡化」という観点から分類を行うことから本稿の論を始めよう。

痕跡化という場合に、アイヌ語語形の原形を残している痕跡と、原形を残していないが、原形とのつながりが確認される痕跡とに分けることができよう。本稿では、そのような潜在的な痕跡も確認材料の中に含めて考える。

ただし、アイヌ語地名を廃止して、全く無関係な日本語地名に変更した地名は対象としない。もっともシコツ（大きい窪地）の名を「死骨」の連想から忌んで、亀田、千歳など、日本語の縁起の良い名に変更したような事例も、現在の地名の成立にアイヌ語地名の変更という原因はあるものの、アイヌ語の語形や原義の継承は痕跡的にも存在しないから、このような場合も痕跡の例には含めるべきではないであろう。

まず、語形がわずかでも顕在している場合から、分類していく。

例えば、nitat（湿地）の漢字をあててもほぼ完全語形で読む、仁達内（にたちない・北海道）などに対して、岩手県の似内（にたない）では語末の子音、いわゆる閉音節を失っているの、日本語化によって、1段階痕跡化しているといえよう。これを「段階1」としよう。漢字を当てたために生じたp音などの喪失もこれにあたる。例えばpiraを「平」（ひら）など。また、閉音節を開音節に替える変化もある。petをペチ（苔米地・とまべち）などである。

次に、東北地方では、このように湿地のニタツに対して、似首（にたくび）、似鳥（にたとり）など、「似」の字がよく使用されていることをふまえて、青森県二戸郡の似平（にひら）などは、「にたひら」が「にひら」に読み替えられたものといえよう。このような場合を日本語化からさらに語形の一部が失われた「段階2」とする。宮城県岩沼市の似田（にた）なども同様であるが、この場合は「た」の読みが「似た」の「た」と、「田」の「た」の双方に掛かっている。細かくみれば、段階1と段階2の過渡期ともいえよう。オベレベレケプを「帯広」など、極端に一部の語形のみを残すものはさらに音訳も「段階3」とみる。漢字二文字化による省字、「仁田別」を「仁別」に、「仁田部」を「仁部」などの変化も「語形の一部にしか漢字が対応しない変化」として、「段階3」の一種として考える。

以上は、アイヌ語語形そのものの消失過程であるが、次に、アイヌ語に当てた漢字による、読み替えにおける、アイヌ語形の痕跡化を問題とする。

例えば、尻内（シリ・ナイ／山川）が「しりうち」と読み替えられている、と推定されるような場合（八戸市）は、「半訓読」と扱ってきたが、そのような日本語化によって、アイヌ語の語形が半減しているという面を、「読み替えによる段階1」の変化とみる。また、ピ（小石）が「檜」（ひ）の当て字を経て「ひのき」と読み替えられた、上述の「檜内」のような場合は、「アイヌ語形に当てた借訓の日本語が、別訓の意味の語形に日本語化される」という、より痕跡化の進んだ「読み替え段階2」といえよう。これらの「半訓読」においては、複合語の中でナイなどの「半原語形」が残っているのであるが、もし「ひのきうち」と、この半原語形も「うち」と日本語化して訓読されれば、アイヌ語形はゼロとなり、アイヌ語形は起因にのみ潜在することになる。これらの借訓の当て字が、音読されてしまうと、アイヌ語形は潜在に変化する。「長内」（おさない）をチョウナイ、「仁田」（にた）をジンデンなどの例がある。「読み替え段階3」である。

このような、アイヌ語形の顕在しない、アイヌ語起源の推定される地名は、まず、アイヌ語地名の日本語への全訳、ポロナイを「大川」などは「段階1」で、語形の一部が訳されていない場合、オタ・シ・ナイを「シ」の部分省略して「砂川」などは「段階2」、アイヌ語形を残しつつ、「半翻訳」されたポロナイから「褰川」（ほろかわ）などは、「翻訳」の型としては、むしろアイヌ語形を残すので、「段階3」というよりは、「半翻訳段階」として別に扱うべきであろう。その意味では「段階1」よりもアイヌ語形に近い。以上の痕跡化段階を今後の考察のために設定した。

3 アイヌ語基本地名で従来東北地方に見出だされなかった地名の探索

この問題については、鏡味（2003）で、東北地方にコタン（集落）の地名の痕跡を探す作業を行い、津軽半島の「小谷」（こたに）と東北全域の「古館」（ふるたて←こたち）にその痕跡の可能性があるのではないか、という論を分布図入りで提示した。今回は、その他の同様の例を探してみたい。

本稿ではまず、コタンのほかに、アイヌ語として、基本的な地名型であり、北海道に顕著に認められる地名で、東北地方に従来確認されていない地名は何か、その探索が従来漏れていたのではないか、という目通しから考察を始めたい。北海道のアイヌ語地名の基本語彙を論じたサンプルとして、山田秀三氏の『角川日本地名大辞典』（北海道下巻）1987所収の「アイヌ語地名の話」から、この基本地名をまず要約引用する。

川筋の主な地名語。ペツ・ナイ（川）、ポロ（大きい、多い）、ポン（小さい、少ない）、ピリカ（美しい）、ウェン（悪い）、フシコ（古い）、アシリ（新しい）、ホロカ（後戻りする）、ウツ（肋骨）、ウツナイ（大川や沼に肋骨のような形で繋がっている川）、ソー（滝）、ト（沼）、クツチャロ（喉口）、パロ・チャロ（口）、プツ（口）、オ（陰部、川尻）、エ・エトコ（頭、水源、山頂）、ピタラ・ピウカ（小石川原）、ハツトラ（淵）、

メム (泉の沸く池), ペテウコピ (川の合流点), ヌタプ (川曲りの袋地), ペンケ・パンケ (川上・川下, 沼, 温泉が並んでいる場合も), シ (本当の, 本流の)。

海辺の地名語。アトゥイ (海), ルル (海, 海水, 海辺), レプ (沖), ヤ (陸地, 陸岸), ピシ (海浜, 大川端), キム (奥山), サ・シャ (前, 浜, 大川端), マク (後, 山の方), オタ (砂), マサラ (砂浜の上の草原), モイ (入江), ウス・ウシ (入江), トマリ (泊地)。

岬の地名語。ほとんど体の部分名。エトゥ (鼻, 岬), シレトゥ (地の鼻・岬), ノツ (あご, 岬), エンルム・シリパ (頭, 岬), シレトコ (地の頭の突出部, 岬), ノテトゥ (岬の鼻か), エサシ (山の頭を浜につけているもの, 岬), オサウシ (山の尻を浜につけているもの, 岬), ホアシ (山の尻を立てているもの, 岬), コイ・チウ・リウ (波)。

山の呼び方。ヌプリ (山), シリ (山), イワ (山, 昔は特に霊山らしい), タプコブ (たん瘤山), キム (里に対する山), フル (丘), ピラ・ペシ (崖), ニセイ (断崖, 峡谷), ウエイシリ (悪い崖)。

原野などの地形。ニタツ・トマム (低湿荒野, やち), サル (葭原), ヌプ (野), ル (道), コツ (窪地), シュマ・スマ (石), シラル (岩), カマ (平べったい岩), イソ・ソ (波かぶり岩), ピ・ピツ (小石, 石), ワツカ (水), ペ (水), クスリ・ユ, セセキ・セセッカ (温泉水)。

動植物地名。ムン・キナ (草の総名), キ (葭, 萱などの総称), ウラシ (笹)。…… (以下主なものに絞って引用) ……モセ (蕁麻), ノヤ (ヨモギ), コンブ・サシ (昆布), ニ (木), タイ・にたい (林), フプ (トドマツ), タツ・タツニ (樺の皮), アツ・アツニ (オヒョウ楡の皮), ケネ (ハンの木), ユク (鹿), カムイ (熊), セタ (犬), トウカル (アザラシ), フンベ (鯨), チカブ・チリ (鳥), チェプ (魚), シペ (鮭), チライ (イトウ), ピパ (沼貝, 烏貝)。

生活の地名。コタン (村, 部落, 居所), チセ (家), プー (倉), クマ (物乾し), カシ (仮小屋), クチャ (丸小屋), カムイ (神), イナウ (木を削った御幣), ヌサ (幣場), ク (弓), テシ (弓), ウライ (築などにつけた漁獲設備), チブ (舟), チャシ (砦)。

色, 方位。レタル (白), クンネ (黒) は明暗として, フレ (赤) 以外の色の例がない。方位名はほとんど使われない。

以上の例示を参考に, これらを語根とした北海道と同じ語構成の地名例を東北地方で確認することになるが, 1) 北海道に例の多い地名語で, 2) 東北地方で従来あまり指摘されなかったもの, 3) 東北地方に例があっても僅少のものを, 上記の基本語から取り出して列挙する。これは選びようで, どれだけでも増減できるが, 一応主なものという目安で選んでみた。

上記の引用の順に, ピリカ, フシコ, アシリ, ホロカ, クツチャロ, ペンケ・パン

ケ、ヌタブ、エンルム、ヌプリ、ピパ、コタン、フレなどである。

その筆頭が先に扱ったコタンであるが、今回は「上下」のペンケ・パンケから、そのような考察を始めたい。

4 東北地方のペンケ・パンケ

上記の引用にも見られるように、アイヌ語の方位の名称は東西南北の方位で示すことは基本でなく、川や池の上手（ペンケ）と下手（パンケ）の対地名がめだっている。同じく、このような対地名ではポロとポンの「大・小」の区別地名があるが、こちらは東北地方にも、「襦」「保呂」（ほろ）、「本」（ほん）などの用字によって、地名例は数多くあるのに対して、パンケ・ペンケの方は北海道におけるように多く見出だされない。比較的容易に確認されるのは、「弁慶」の当て字による「上手」のペンケで、青森県東津軽郡平内町大字白砂の「弁慶内」（べんけいない）などは「川」のナイも維持された名である。金田一京助「北奥地名考」（1932）にもこの弁慶内を引いて、「上の川」であることは疑いないこと、ペンケ・ナイの対地名なのに、「この方は附近に今名を留めて居ない。北海道では、ペンケがあったら、必ずパンケが附近にある」と述べている。調べると秋田県本荘市大字石脇にも弁慶川の字名があり、山形県鶴岡市大字加茂にも弁慶沢の字名がある。それぞれ、「川」「沢」がついているので、「上の川」のペンケ地名であろう。なぜ、対地名が見出だされないのか、また、ペンケに対してパンケに比定される地名はないのか、という探索を進めた結果、思い当たったのは、福島県の会津坂下（あいづばんげ）の駅名もある、「坂下町」（ばんげまち）の名である。この読み方は考えてみると奇異なもので、文字通りの「坂の下」地名であれば、わざわざバンゲと音読するのは通例ではない。全国に「坂下」（さかした）と称する地名は数多くあるが、この字でバンゲと音読するのはこのほかには、同じく福島県の西白河郡表郷村大字小松の字、坂下（ばんげ）ぐらいである。「さかげ」の読み方が1例、三重県伊賀市大山田にある。

おそらく、福島県の二つの坂下（ばんげ）は「下手」の意のパンケの当て字からの音変化であり、借音の「坂下」の字をあてた動機の一つは「坂下」の「下」の字にあり、パンケの「下」の意の翻訳も兼ねたとみることができよう。表郷村の坂下は近くに番沢（ばんざわ）の地名があり、これもパンケ・ナイの遺称かもしれないが、ペンケではないから、これと対地名ではない。

ここまで、検討してから、なお東北地方のアイヌ語地名を扱った諸家の論考に目通しをしていたら、山田秀三「南のアイヌ語地名？——福島県・関東周辺の散策記」『北奥古代文化』17（1986）にこの会津坂下の探訪記があって、坂下町宇内（うない・さきに引いた「肋骨の川」）の探訪に関連して、次のようなパンケ解が述べてあった。さすがに東北各地をくまなく実地検分された著者ならではの論である。少し長いが原文を引用する。



図1 坂下（ばんげ）と付近の河川

国土地理院発行の5万分1地形図「喜多方」（平成13年要部修正）を縮小使用したものである。

「宇内から鶴沼川を少し遡った処に坂下^{ばんげ}という古くからの市街がある。（中略）まあめったにない地名である。

だが北海道へ行けばパンケ（川下の）はペンケ（川上の）に対照して使う。至る処にあって珍しくも何ともない地名語。今は万景だの、班溪だのの字があてられている。大川（古くは黒川）がペンケ・ペツ、今の鶴沼川（昔の宮川）がパンケ・ペツだったとするならばぴったり北海道型である。また佐賀瀬川がペンケ・ナイで、塔寺の沢がパンケ・ナイだったとしても考えられる地形である。アイヌ語だったらごくありふれた地名語で、地形的にも説明がつく地名なのであった。

宇内が一つぼつんとあるだけではと思っていたのであるが、すぐ近い処に坂下があった。今すぐこれらがアイヌ語だとい切る自信はないが、併せて参考になる種として書き添えた。」

原文には著者による「略図」が添えてあったが、ここでは地形図を掲げて関係の地名と地形を見ることにする（図1）。

地形図上の地名で、とくにペンケからの転をうかがわせる地名は見当たらないが、阿賀川（大川）を渡った東岸、佐野目の小字名に「ヒヤケ田」（『角川日本地名大辞典』（福島県）より）というのがちょっと気になった。カナ書きで漢字をあててないのもいわくありげで、ひよっとしたら、ペンケからのヘンケを経た音転の可能性もあるかと思われる。また坂下のすぐ上手の東南にある福原には「沼の上」の小字があることも付け加えておこう。

東北地方にわずかに散見する以上のペンケ・パンケ地名がなぜ、対地名として残存していないのか、一つ考えられることは、アイヌ語を離れて日本語化した場合に、ペンケ・パンケは類音で区別しにくいということがある。そこで片方しか残らなかったり、日本語地名の「上^{かみ}」「下^{しも}」に圧倒されるに至ったのであろう。

5 東北地方にエンルム（岬）はあるか

金田一京助「北奥地名考」（1932）に東北地方で認められるアイヌ語地名を「推定される奥州のアイヌ地名」で取り上げた中で、「崎の古いアイヌ語エンルムは、奥州のどこかに残っていそうで、外に見当たらないのは不穿鑿の致すところであろう」と述べていて、その検索は久しく宿題になっていた。これについても山田秀三に論があった。氏の最晩年の未定稿を集めた『東北・アイヌ語地名の研究』（1998）には「エンルム（岬）の話」の一文があって、次のように述べている。

「北海道にむやみにあったエンルムなので、津軽海峡の南にもあったらと思うが案外ほとんど見当たらない。ここではもしかしたらと思う二つの地名に付いて思い付きのようなことを書いておきたい。」

として、津軽半島北西部の十三湖の北一帯の地名として「江流末」（えるま）をとりあ

げて、

「これもエンルムの一つだったのではないかと考えた。十三湖のすぐ北には大きな尾崎（権現崎）があり、また湖の北岸にも二、三の岬がある。その一番奥の今泉の西側の岬は「泉」の付いた土地のはずれだし、また古く『十三往来』に書かれた^{えるま}恵瑠磨明神や、また入潤城址もこの附近と推定されているので、或いはその小さい岬が古くエンルムと呼ばれ、それが広地名化して江流末となったか、とも読まれる。」

という。

「また、『日本書紀』の阿部の臣北征記の中に書かれた有間の浜も、語頭がエでなくアの処が気にかかるが、とにかく似た音である。」



図2 十三湖と江流末の故地

国土地理院発行の5万分1地形図「小泊」(昭和60年修正)を使用したものである。

と述べ、多くの舟を泊められたのは波静かな十三湖ではなかったかと述べている。

なお、もう一つの地名として、新潟県の出雲崎を挙げ、「もう少し暖めて適否を考えたい」としている。

江流末は戦国期に見える古郡名で、「十三ノ湊郡」ともいったと天文年間の『津軽中名字』にある。それ以前の中世文書に見えないので、実在を疑問視もされている由であるが、正規の郡名であったかはともかく、このような通称名はあったのであろう。西鶴定嘉『東北六県アイヌ語地名辞典』（1995）には、十三湖の小湾入のある「前瀧」のことで、「e（尖った）rum（矢の根）ma（潤）」（尖った矢の根のような潤）と解するが、むしろ enrum-ma（岬のある潤）と解するのが妥当であろう。十三湖のこれらの関連地名の附近を地形図で図2に示した。

次に、新たにこれらの類例をつけ加えれば、津軽にはほかに恵神崎（えがみざき）という岬もあり、これは西津軽郡の岩崎村の岬である（図3）。この岬角名の語頭の「恵」の部分にエンルムの「エ」が残存しているかもしれず、あるいは北海道の恵山（えさん）のようにエサン（頭が浜に出ている岬）かも知れない。あるいは、もしもここも上掲の「恵瑠磨明神」と同じ名からの「恵神崎」ならば、ここもエンルム起源の可能性がより出てくるのではなかろうか。

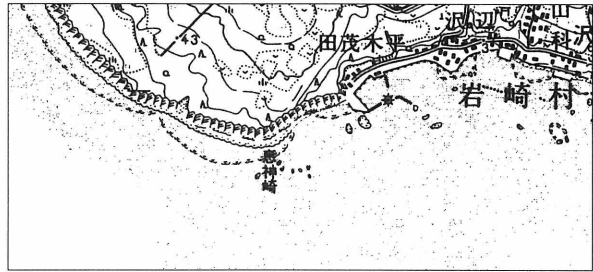


図3 恵神崎

三陸海岸など太平洋側では適例を見出さなかつた。

国土地理院発行の2万5千分1地形図「十二湖」（昭和60年修正）を使用したものである。

6 おわりに

今回は、これまでも扱ってきたアイヌ語地名を、痕跡化という面からとらえなおすことと、そのような痕跡化したアイヌ語地名の掘り起こしの数例を「ペンケ・パンケ」と「エンルム」の2事例について検証した。これらの作業はアイヌ語地名の濃密な東北地方を南限として、その中の落ち穂拾いの作業として進めているものであるが、アイヌの足跡の証明されていない、東北地方以西南の、ともすれば虚構の危険のあるアイヌ語解よりも、アイヌ語の安全圏の中での落ち穂拾いの方に使命と急務を感じているものである。ここで引用列举した「アイヌ語基礎地名」から、今後も取り上げる項目を増やして、東北地方の検証を続けていきたいと思う。

引用文献（掲出順）

- 鏡味明克（2003年）「アイヌ語地名の日本語接触変化」『人間文化』18号
鏡味明克（2004年）「北海道におけるアイヌ語地名の現代日本語接触変化」『人間文化』19号
鏡味明克（2005年）「北海道におけるアイヌ語地名の好字への書き替え・読み替え」『人間文化』20号
鏡味明克（1979年）「地名の分布図を読む」『国語学』119号
鏡味明克（1991年）「東北地方におけるアイヌ語起源の地名の日本語化」『語源探求』第3集
山田秀三（1987年）「アイヌ語地名の話」『角川日本地名大辞典』（北海道 下巻）
金田一京助（1932年）「北奥地名考」『金沢博士還暦記念東洋語学の研究』
山田秀三（1986年）「南のアイヌ語地名？——福島県・関東近辺の散策記」『北奥古代文化』17号
「小字一覧」『角川日本地名大辞典』（福島県）（1981年）
山田秀三（1998年）『東北・アイヌ語地名の研究』草思館
西鶴定嘉（1995年）『東北六県アイヌ語地名辞典』国書刊行会